



バックカントリー・ツアー体験における効果と要因
の関係性：
クロスカントリースキー・ツアー体験におけるMean
s-End Analysis

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-09-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 濱谷, 弘志, 平田, 裕一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006578

バックカントリー・ツアー体験における効果と要因の関係性
— クロスカントリースキー・ツアー体験におけるMeans-End Analysis —

濱谷 弘志・平田 裕一*

北海道教育大学岩見沢校 自然体験活動研究室

*至学館大学

The relationship between effectiveness and factors
in the backcountry tour experience

— Means-End Analysis about the cross country ski tour experience —

HAMATANI Hiroshi and HIRATA Yuichi*

Department of nature experience activity, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

*Shigakkan University

概 要

本研究はバックカントリーで行われたクロスカントリースキー・ツアー体験が、参加者に及ぼす効果とその要因の関係性を明らかにすることを目的とした。マーケティング調査で利用されるMeans-End Analysis (ME分析) を用いて、S大学授業の雪上実習にて行われたクロスカントリースキー・ツアー参加者に対してラダリング調査を行なった。調査は、ツアー体験中のどのような機会(要因)が、どのような体験として認知され、結果どのような価値(効果)をもたらすのかについて関係性を調べた。その結果、最も強い関係性が見られたのは、「ゴール着」が、「仲間を感じる体験」と認知され、「達成」という効果に繋がったものであった。また、「ゴール着」は、「自己成長体験」と認知され、「達成」という効果にも繋がった。

1. 研究の背景

日本においてスキーと言えば、スキー場でのアルペンスキーがまず頭に思い浮かぶ。1980年代のバブル経済により起きた空前のスキーブームは、その後の経済の低迷とともに下火となり、さらに

若者のスキー離れが増加し、終焉を迎えることとなった。しかし、ここ数年、若者を中心にスキー場コース外を滑るバックカントリースキーが徐々に注目を集め、人気となっている。志賀ら¹⁾は、バックカントリースキーへの参加動機について調査・検討し、「対人関係を契機とするもの」と「雑

誌等のメディアの情報源を契機とするもの」があることを明らかにした。坂谷ら²⁾によると、「スノースポーツ愛好家は成熟に伴い、より自然を求め、より高い楽しみを求める志向が高まってくる。これに合致した活動がBCスキー（バックカントリースキー）である」としている。

一方、歩くことを目的としたスキーとして、クロスカントリースキーがある。その起源はスカンジナビア半島で、雪の山野で狩りを行う際の移動手段として誕生したとされており、これが現在のクロスカントリースキーに当たるものであるとされ、その後、ヨーロッパのアルプス地域でアルプスの山々から滑降するためにアルペンスキーが開発された³⁾とされている。日本では全国的に見ると、クロスカントリースキーはそれほど普及しているとは言えず、おもに冬の競技スポーツとしてスキーマラソンなどタイムを競う競技会や大会などが行われているぐらいである。しかし、北海道の札幌市や旭川市などでは、市内や郊外の公園などにコースが設けられ、休日になるとクロスカントリースキーで歩いたり、散策したりする人の姿も珍しくない。前田⁴⁾は「歩くスキー」について、「『歩くスキー』とは『自然』のフィールドを前提としたスキーの実施形態、すなわち『対自然スポーツ』である」とし、またフィンランドのクロスカントリースキー文化を取り上げ、「『対自然スポーツ』『自己発見の文化』として、フィンランド人の人々が持ち得ているような自然への感性、高い精神性を養い」と述べている。これらのことから、クロスカントリースキーは、単に冬期の競技スポーツとしての魅力だけではなく、冬の自然体験活動として体験により得られる様々な効果があると考えられる。それでは、どのような効果が期待でき、その効果はどのような要因からもたらされるのだろうか。

2. 先行研究

バックカントリーに関する研究として、Marsh⁵⁾はMeans-End Analysis (ME分析) を用

いてバックカントリー体験の効果と要因の関係性について調査を行い、バックカントリー体験により、9つの体験認知が生まれ、8つの効果に発展したことを報告している。

ME研究はマーケティング調査において、消費者の購買意思決定過程を明らかにするために、Guttman⁶⁾によって開発された研究手法であり、商品の特徴を表す属性 (Attribute)、そこから得られる結果 (Consequence)、その先につながる価値観 (Value) というつながりをラダリングという手法で調査し、消費者が重視する、属性-結果-価値のつながりをヒエラルキカルバリューマップ (HVM) にモデル化するものである⁷⁾。

野外教育の分野では、Goldenberg et al.⁸⁾やHaras et al.⁹⁾がこの手法を用いて、冒険教育プログラムやロープコースプログラムの効果とその要因を明らかにする調査を行っている。日本国内でも、岡村ら¹⁰⁾や岡田ら¹¹⁾がME分析を利用した研究を行っている。

著者¹²⁾はMarshの研究を参考に、日帰りのスキー登山を目的に大学授業で行われたバックカントリー・スキー・ツアーが、どのような体験認知、効果に発展するのか、その効果と要因の関係についてME分析を用いて調査し、4つの要因から6つの体験認知が起り、5つの効果に至ったことを明らかにした。その中で、「山頂からのスキーでの下り (2日目)」が「たのしい体験」と認知され、「満足」という関係が最も強いつながりとなり、同様に「山頂からのスキーでの下り (2日目)」は「チャレンジ体験」と認知され、「気づき」にも発展した。

滑走を目的に山を降り下るバックカントリースキー体験に対して、どちらかという森や平原などのフィールドで歩くことを中心に行われるクロスカントリースキー・ツアー体験では、どのような効果が得られるのであろうか。また、その効果は、どのような活動場面 (機会) に起因しているのだろうか。

そこで本研究の目的は、クロスカントリースキー・ツアー体験がどのような体験認知、効果に

発展するかを調査し、その効果と要因の関係を明らかにすることとした。

3. 研究方法

3.1. 調査対象者

調査対象者はS大学授業「野外活動Ⅲ指導法」を受講し、雪上実習に参加した2～4年生76名とした。その内訳は、2年生67名、3年生8名、4年生1名であった。性別については、男子47名、女子30名であった。

3.2. 授業の概要

授業「野外活動Ⅲ指導法」は、S大学健康科学部健康スポーツ科学科2年生後期開講の選択必修科目であり、雪上活動に関する15回の講義と5泊6日での雪上実習で行われた。授業の目標は、「授業時間内で冬期雪上活動の事前学習（含む準備）と5泊6日の学外実習で構成する。特に学外実習では、日常生活から離れた大自然の中で、バックカントリースキーや雪上生活体験などの活動を通じて、

- 1) 雪山という自然環境を理解する
- 2) 雪上体験の基礎的な知識と技術を学ぶ
- 3) 青少年教育施設を利用する中で社会教育の学習を行う
- 4) 授業に関わる多くの人々と交流することで自己を拓げる

ことを目的に、実施するこれらの活動を通じて、雪上でのリスクマネジメント能力、冬の自然理解、自己・他者理解の向上が行える」とされていた。

3.3. 雪上実習の概要

雪上実習は平成28年2月27日（土）から3月3日（木）まで5泊6日の日程で、新潟県妙高市にある国立妙高青少年自然の家にて行われた。6日間のスケジュールの概要を表1. に示す。

実習中は3日目の選択活動を除き、一班6～7人から成る12班での班単位で活動を行い、3日目の夜は班で製作したイグルーで宿泊した。それ以

表1. 雪上実習スケジュール概要

1日目	午前	移動（バスで大学より現地）
	午後	開講式、施設散策（XCスキー・かんじき）
2日目	午前	XCスキー練習・散策
	午後	雪上生活・空間づくり
3日目	終日	雪上レク 雪上生活・空間づくり
	夜	雪上宿泊
4日目	午前	雪上宿泊終了 片付 ふりかえり
	午後	選択活動 S祭準備
5日目	終日	XCスキー・ツアー
	夜	S祭（スノー・シアター）
6日目	午前	撤収・片付 閉講式
	午後	移動（バスで現地より大学）

外の日は施設内での宿泊であった。

クロスカントリースキー・ツアーは実習の5日目に行われた。ツアーは班単位で国立妙高青少年自然の家を出発し、地図とコンパスを使い、指定された施設外にある「ゴルフ場入り口」「坪岳池」「ボウボ岩」を經由し出発地点に戻るコースであった。ツアーコースは、途中上り、下り、車道の横断、沢の横断、昼食（弁当）時間などが含まれ、コースの総距離は約5.6km、累積の上りは約1,019m、累積の下りは約1,032m、活動時間は約6時間52分（いずれも著者が実踏した際に使用したアプリYAMAPのデータによる）であった。

3.4. 調査方法

クロスカントリースキー・ツアー中のどの活動場面が、どのような体験と認知され、どのような効果につながったかという関係性を調査するため、ラダリング調査を行った。調査には、著者が開発した「バックカントリー・スキー・ツアーふりかえりシート」を参考に、調査用紙（資料1）を作成した。内容は以下の通りであった。

調査項目1「今回のXCスキー・ツアーを通じて感じた気持ちはなんですか」に対して、「達成」「満足」「充電」「自信」「つながり」「自然」「平和」「感謝」「その他（ ）」から回答を一つ選択。

調査項目2「その気持ちを一番強く感じたのはどの活動場面ですか」に対して、「スキーでの登り」「沢渡り」「坪岳池到着」「スキーでの下り」「休

資料1. バックカントリー・スキー・ツアーふりかえりシート

実習お疲れ様でした。5日目に行ったXCスキーツアーに関する調査について、ぜひご協力をお願いします。同じ質問に2回答えて下さい。

北海道教育大学 濱谷 弘志

名前 _____ ・学年 _____ 年生 ・性別 男 女

下記の質問に対して、選択肢から一つのみ選び○をつけて下さい。

質問1 今回のXCスキーツアーを通じて感じた気持ちは何ですか？

達成 満足 充電 自信 つながり 自然 平和 感謝 その他()

質問2 その気持ちを一番強く感じたのはどの活動場面ですか？

スキーでの登り 沢渡り 坪岳池到着 スキーでの下り 休憩中
ボウボ岩に到着 昼食 ゴールに到着 その他()

質問3 その活動場面は、あなたにとってどのような体験でしたか？

集中した体験 自分に向き合う体験 仲間を感じる体験 自己成長体験

美しさに触れる体験 自然のすばらしさを認識する体験 環境保全を考える体験

質問1 今回のXCスキーツアーを通じて感じた気持ちは何ですか？

達成 満足 充電 自信 つながり 自然 平和 感謝 その他()

質問2 その気持ちを一番強く感じたのはどの活動場面ですか？

スキーでの登り 沢渡り 坪岳池到着 スキーでの下り 休憩中
ボウボ岩に到着 昼食時 ゴールに到着 その他()

質問3 その活動場面は、あなたにとってどのような体験でしたか？

集中した体験 自分に向き合う体験 仲間を感じる体験 自己成長体験

美しさに触れる体験 自然のすばらしさを認識する体験 環境保全を考える体験

ご協力ありがとうございました。

憩中「ボウボ岩に到着」「昼食」「ゴールに到着」「その他（ ）」から回答を一つ選択。

調査項目3「その活動場面は、あなたにとってどのような体験でしたか」に対して、「集中した体験」「自分に向き合う体験」「仲間を感じる体験」「自己成長体験」「美しさに触れる体験」「自然のすばらしさを認識する体験」「環境保全を考える体験」から回答を一つ選択。

調査時期は雪上実習終了後、大学に戻ってから最初の授業である3月4日に大学にて行い、調査用紙に記入後、回収した。なお、回答は1人2回まで求めた。

3.5. 分析方法

データの分析には、3E (Experiential Education Evaluation) フォーム¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾を用いた。3Eフォームは、ME理論に基づき、体験学習活動を簡便で効果的に評価できるツールであり⁶⁾、得られたラダリング調査のデータ入力により、ヒエラルキカルバリユーマップ (HVM) を作成し、効果と要因の関係性を視覚的に示すものである。

4. 結果

調査の結果111件の有効回答が得られた。回答データの分析は、3Eフォーム¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾を用い、クロスカントリースキー・ツアー中のどの活動場面（機会）が、どのような体験として認知され、どのような効果に繋がったのかについて分析を行った。全回答を元に作成したヒエラルキカルバリユーマップ (HVM) を図1に示す。より強い関係性を見るため、カットオフレベルを4（回答数が4以下のものを削除する作業）に統制したHVMを図2に示した。

最も強い関係性が見られたのは、「ゴール着」が「仲間を感じる体験」と認知され、「達成」という効果に繋がったものであった。また、「ゴール着」は「自己成長体験」と認知され、「達成」という効果にも繋がった。

「ゴール着」は他に、「仲間を感じる体験」と

認知され、「つながり」「感謝」という効果、また、「自己成長体験」と認知され、「自信」という効果にも繋がっていた。さらに、「ゴール着」は「自然の素晴らしさを認識する体験」と認知され、「達成」や「自然」という効果にも繋がっていた。

「ゴール着」以外では、「昼食時」が「自然の素晴らしさを認識する体験」と認知され、「自然」という効果に繋がった。

5. 考察

今回の調査では、「ゴール着」が「仲間を感じる体験」と認知され、「達成」という効果、また、「自己成長体験」と認知され、「達成」という効果に繋がった関係性が、際立って強いものであった。その要因として、クロスカントリースキー・ツアーは、班ごとで出発時間と到着時間を設定して行われたため、どの班も時間内にゴールするというタスク意識が強く働いたと考えられる。それに加え、ほとんどの学生が、学内や日常生活でスポーツに関わり、競争意識が自然と芽生えたこと。また、今回初めてクロスカントリースキーを学び、中々思うようにスキー操作ができず、スキーでの上りや下りでの滑走、途中の沢渡りなどで悪戦苦闘する中、班のメンバーで協力しながら、ゴールにたどり着いたことなどが、班での達成感に繋がったと考えられる。

また、「ゴール着」や「昼食時」が「自然の素晴らしさを認識する体験」と認知されたのは、スキーで移動している際は、感じてはいるもののしっかりと認識する余裕があまりなく、足を止めて周りを見回せる時間的な余裕がある昼食時や、ゴールしてそれまでの行程を振り返る際に認知されたと考えられる。

6. まとめ

本研究はクロスカントリースキー・ツアー体験が、どのような体験認知、効果に発展するかを調査し、その効果と要因の関係を明らかにすること

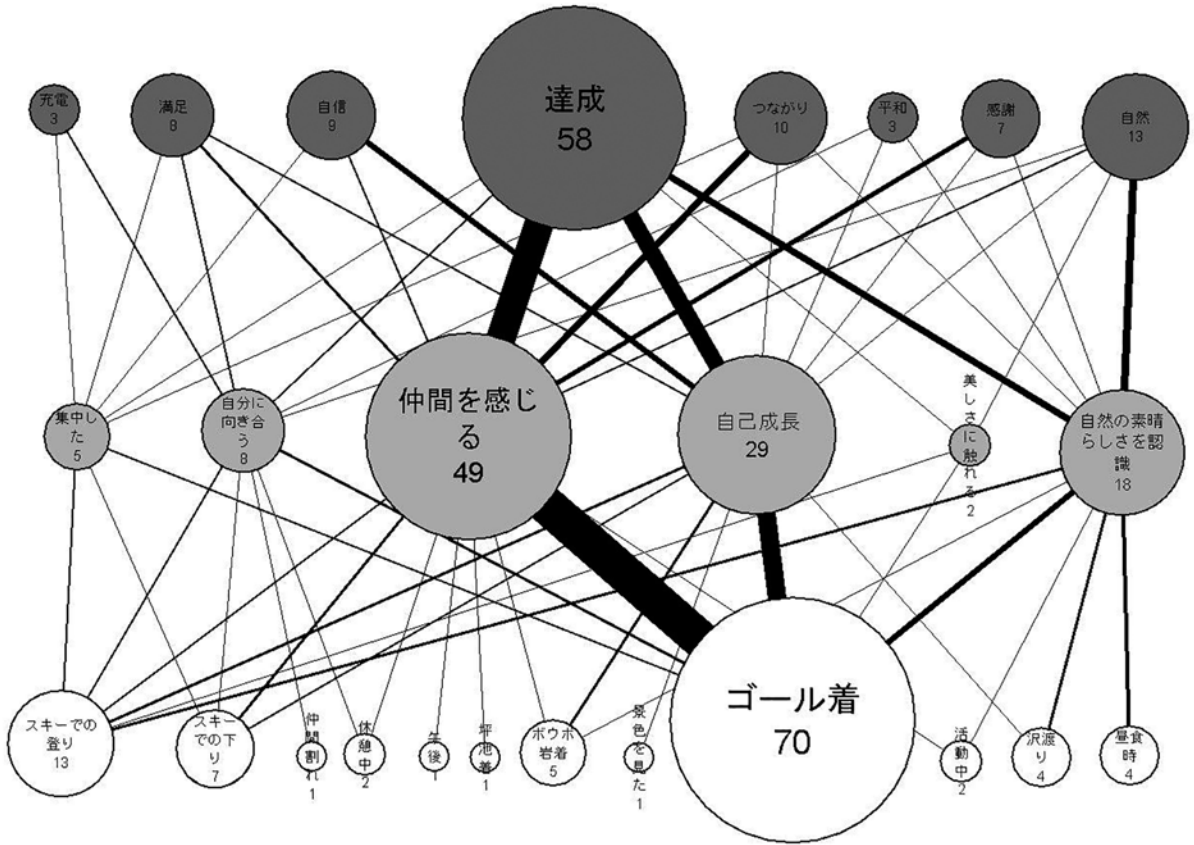


図1. クロスカントリースキー・ツアー HVM (cut off level=0)

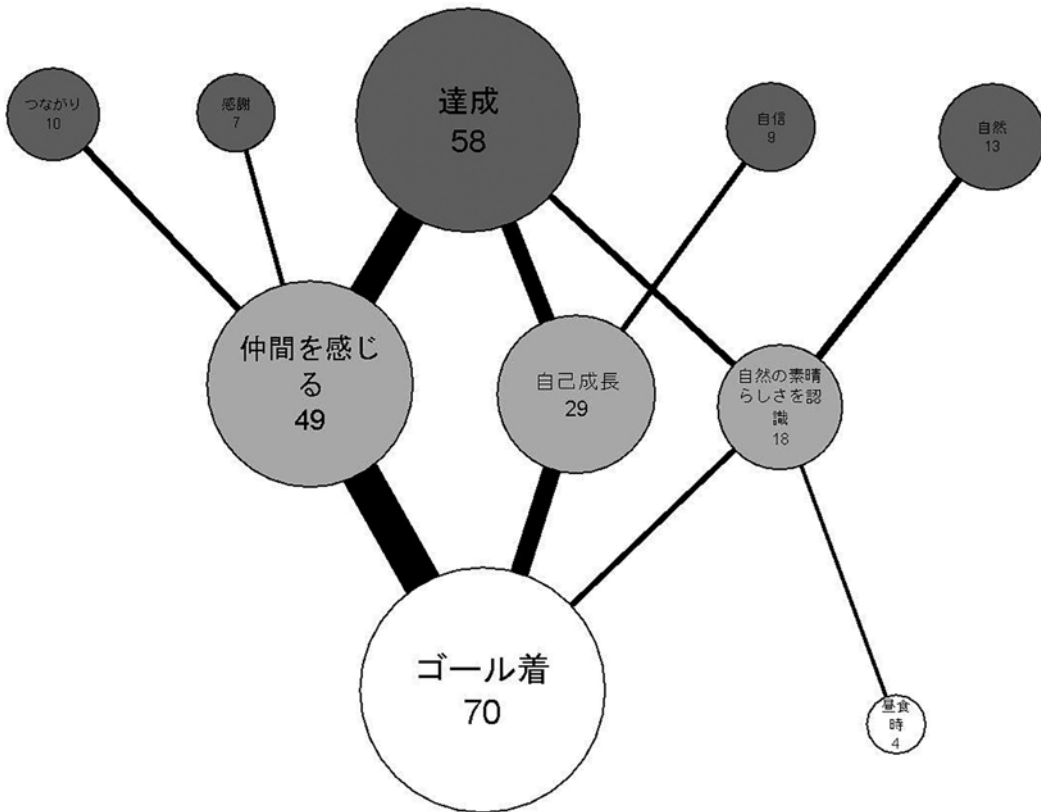


図2. クロスカントリースキー・ツアー HVM (cut off level=4)

を目的とし、大学生の雪上実習で行われたクロスカントリースキー・ツアー参加者を対象にラダリング調査を行った。その結果、最も強い関係性として「ゴール着」が、「仲間を感じる体験」と認知され、「達成」という効果、また、「自己成長体験」と認知され、「達成」という効果に繋がったことが明らかとなった。

7. 今後の課題

今回の調査対象者は、スポーツについて学び、日常的にスポーツに関わる大学生が主であったことから、設定時間に対しての達成意識や競争意識により、ゴール時の達成感が出やすいものとなっていた。そのため、異なるスキー・ツアーの設定条件や異なる対象者では、どのような効果と要因の関係性があるかについて調べる必要があると思われる。例えば、時間を気にせず余裕を持ってツアーを行うような設定、中高年や日常あまりスポーツに関わることが少ない方を対象者にした場合など、様々な条件や対象者で行うことで、自然体験活動としてのクロスカントリースキー・ツアー体験の可能性が拡がると考えられる。

註

- 1) 志賀亮太, 坂本昭裕 (2010) なぜバックカントリースキーを求めるのか～バックカントリースキーへの移行に着目して～, キャンプ研究第14巻第1号, 26-27
- 2) 坂谷充, 井村仁 (2013) 近年のバックカントリースキーの動向について, 日本野外教育学会第16回大会プログラム・研究発表抄録集, 78-79
- 3) ウィキペディア
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%82%AD%E3%83%BC>
- 4) 前田 (1994) 「自然」へ開かれたスキー～「歩くスキー」の理論に学ぶ～, 北海道教育大学紀要 (第2部C) 第45巻第1号, 71-77
- 5) Guttman A. (1982) A means-end chain model based on consumer categorization processes. *Journal of Marketing*, 46, 60-72
- 6) 岡村泰斗 (2012) Experiential Education Evaluation Form : 3Eフォームのデモンストレーション, Camp

- Meeting in Japan 2012-第16回日本キャンプ会議-抄録集, 公益社団法人 日本キャンプ協会, 12-13
- 7) Goldenberg, M. A., McAvoy, L., & Klenosky, D. B. (2005). Outcomes from the components of an Outward Bound Experience. *Journal of Experiential Education*, 28(2), 123-146
 - 8) Haras, K. Bunting, G., & Witt, P. (2006). Meaningful involvement opportunities in ropes course programs. *Journal of Leisure Research*, 38(3), 339-362
 - 9) 岡村泰斗, 岡田成弘, 荒木恵理 (2009) Means-End Analysisを用いたキャンプ効果の測定, 日本野外教育学会第12回大会プログラム・研究発表抄録集, 50-51
 - 10) 岡田成弘, 岡村泰斗 (2009) 組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連, 日本野外教育学会第12回大会プログラム・研究発表抄録集, 48-49
 - 11) Marsh, Paul E (2008). Backcountry Adventure as Spiritual Experience : A Means-End Study, Indiana University, School of Health, Physical Education and Recreation
 - 12) 濱谷弘志 (2016) バックカントリー体験がもたらす効果について-大学でのバックカントリースキー授業におけるMeans-End Analysis, 北海道教育大学紀要教育科学編66巻第2号, 247-252
 - 13) 岡村泰斗 (2013) : ウィルダネスプログラムを導入した新入社員研修の成果 : 3Eフォームを用いて, 日本野外教育学会第16回大会プログラム・研究発表抄録集, 56-57
 - 14) 岡村泰斗, 古川和, 濱谷弘志, 高山昌紀, 島崎晋亮, 渡辺佐智, 寺田匡志, 岡田成弘, 佐藤冬果, 篠原健二 (2012) 冒険教育を導入した新入社員研修の効果 : 3Eフォームを用いて, 日本野外教育学会第15回大会プログラム・研究発表抄録集, 100-101
 - 15) Mark Wagstaff, Taito Okamura (2013) Assessing the Impact of a WEA Outdoor Leadership Course, 日本野外教育学会第16回大会プログラム・研究発表抄録集, 112-113

(濱谷 弘志 岩見沢校 准教授)

(平田 裕一 至学館大学 教授)